

マイフェイバリットライフ in 美幌町



ぼちぼち農場 荒木千夏

(あらき ちなつ)

- ・昭和50年生まれ 大阪府大阪市出身
- ・2005年に脱サラし大阪から北海道へ移住し農業研修を経て2009年、美幌町で新規就農
- ・大阪時代からの友人・川野美香さんとともに、レタス・ブロッコリー・グリーンアスパラ・塩トマトなどの施設栽培を含め約8ha耕作
- ・趣味は、読書と美術館めぐりと37歳からはじめたピアノ
- ・平成27年度新規就農優良農業経営者優秀賞 受賞

一面真っ白の冬がまたやってきました。

毎年、冬に願うことは「除雪の回数が少ない冬でありますように」これだけを切に願っている。

敷地の大部分を機械で除雪するが、やはりスコップでの除雪は欠かせない。就農当初から比べればスコップの扱いにも慣れコツも掴んだので、できるだけ無駄な力を使わないで除雪することができるようになった。

毎年、除雪のときに聞く音楽を用意して冬を迎える。今年もテンションがあがる音楽を携帯に入れて冬の除雪を乗り切りたい。

No Music ! No Snow Life !

● 健康第一

冬に向けての準備は色々あるなかで、トラクターからスプレイヤーを外す作業をしていたときのこと。

いかにも重そうな鉄の塊を見て、これは力がいると張り切って持ったところ、突然息がでないくらいの痛みが脇腹に走った。一瞬の痛みかと思いきや、痛みは更に続き作業ができなくなった。

一緒に作業をしていた川野さんに向かって「肋骨が全部折れた！」と口走ってしまった。

「えー？肋骨、全部？？」

「二四本とも全部？？」

「・・・」

少し痛みが和らいできたときに先ほどの会話を思い出して笑いが込み上げてきた。笑うと痛いのに込みあげてくる笑いを抑えられない。地獄だ。肋骨全部が折れているわけがない。

私は、気温が下がってくる秋頃に、毎年と違っていいほど背中筋を痛めてし

まつ。今年の秋もまたやってしまった。湿布で患部を冷やして三日ほどで完治したが、健康な身体あつての仕事だと今年の秋も思わされた。

● パートさん

野菜だけを栽培して出荷している私の農場では機械化できない部分がほとんどで、人手を必要としている。

毎年、人手不足にならないように作付計画をたてたり、もしくはパートさんを募集したりしながら仕事を進めている。作物を栽培する以外にそついった雇用関連も仕事のひとつだ。

人を雇用し始めたのは五年前からで、最初の頃は四苦八苦しながらだったが、去年あたりからは農場に常にパートさんがいるなかで仕事を進めることに少し慣れてきた気がする。

農業は作物と向き合い、ほぼ個人プレー的な仕事だと思っていたが、野菜屋さんはそのついでにはいかなないと最近とくに思う。

共に働いてくれるパートさんがとても大切だ。共に汗を流し笑ったり、時には旦那の悪口で盛り上がったりしながら、そつやって忙しい夏を乗り切る。

引っ張っていくのは私なんだと肩に力が入っていたときもあったけど、最近では逆に引っ張っていてもらっているところも少なからずある。事業主なんだからこうあるべきだという固定概念を捨てて、農業を通して人と関わりながら自然とそつなれば良いと思う。

農場を離ればそれぞれの家庭があり、用事があり、事情があるなかで、春から農場での仕事が始まるとまた集まり冬には散り散りになる。こうして、一年を繰り返す人生の一部分を共有しながら共に歳を重ねられる人がいるということに喜びを感じる。

今でもまだまだ至らないところだらけの農場だけど、これから少しずつ人と共に成長していける農場にしたい。

● 川野さん

私のよき友、よき悪友。そして一番の理解者。

今から一六年前に東京で出会い、同郷だったこともあり大阪に戻ってからは少し一緒に仕事もした。

そして、場所を移して北海道では共に同じ夢に向かって互いに励ましあいながら新規就農までの道のりを歩んできた。勿論、口喧嘩をすることもあるし、お互いに頑固で譲れない部分もあるけれど、



それでも思い返せば二人でたくさん笑った記憶の方が多い。

大変だったこともネタにして笑って乗り越えてきた。就農してからもブレることなく同じ夢を持ち、ただひたすら前だけを掲げて歩んできた。

大きな山を乗り越えるのに互いに足りないものを補い合い、そして乗り越えた喜びを共に分かち合い今の私達がいる。

これから農場も九年目を迎える。いつの間にかこんなに月日が経ったんだというのが正直な感想だが、これからもずっとずっと前を向いて進んでいきたい。

山があり谷があり少し後ろに下がっても、それでも私達らしくほちぼちと進んでいきたい。

● 北海道の景色

夏にトラクターで国道を走っていたら、前を走っていた車が止まり、観光客らしき夫婦が車から降りてきて私のトラクターを止めた。何かかと思いつつトラクターから降りて話を聞くと、国道横の畑で栽



培されているビートを指差して、これは一体何か?と聞いてきた。

一〇年以上前に私が北海道旅行していたときに、私も「コレナニ?」と不思議に思っただけで見ていたことを思い出した。ビートという作物で砂糖の原料になることを教えたなら納得していた。

また、トラクターに乗り自宅への帰り道に、ふと考えた。私も北海道旅行していたときに同じ疑問を持っていた。そして道を走っているトラクターや畑、放牧されている牛などを見て「北海道だあ!」といちいち感動していた。

さきほどの夫婦は私を北海道の景色のひとつとして見てくれていたかしら。ト

ラクターに乗っている私は、旅行者から見て北海道の景色の一部として上手なれていたかしら。いや、さっきの会話はもっと北海道弁を交えて話すべきだった。少し関西弁が混じっていた。

次に、こういう機会があったら「あれはビートだべさ」と答えよう。

● この町

トラクターに乗って国道を走っていると近所の農家さんが挨拶がわりに手を振ってくれ、私も振りかえす。スーパーで買い物をしていると知り合いの農家さんに声をかけられ、立ち話をする。ガソリンスタンドで給油をしているとスタンドのおじさんに「久しぶり。仕事は順調?」と声をかけられる。

こんな他愛もない日常の出来事を振り返ると、私も随分この町に馴染んだと嬉しく思う。

毎年十一月には二週間ほど大阪に帰るが、帰る時期が近づいてきたときに「待ってるからね」と言ってくれた人が

いた。私にはここで待っていてくれる人がいるんだと、とても嬉しい気持ちになった。

この町に住んで十一年。少しづつだけ、私にとって居心地のいい町になってきた気がする。最初は知り合いも友達もいないなかで過ごしてきたけれど、今は知り合いも増え、友達もできた。

これからもこの町でいろんな出会いがあり、そして出会った人達とたくさんのお出を出を作っていく。思い出の多い人生はきっと豊かなものになる。

これからも思い出をたくさん作り、そしてお婆ちゃんになったときには、その思い出に少し脚色を加えてオチのある小話ができるようになりたい。

● 自分からの手紙

畑も決まり野菜農家としていよいよ新規就農するという前年の秋、私は将来の自分に向けて手紙を書きお菓子が入っていた缶にその手紙を入れ、初めて北海道旅行をしたときに立ち寄ったことのある

見晴らしのいい展望台にそのお菓子の缶を埋めた。そうタイムカプセルを埋めたのだ。今までまだ一度もそのお菓子の缶を掘り起こしたことはない。

今となっては何を書いたのかも綺麗さっぱり忘れてしまっている。

二〇一八年には農場が一〇年目を迎える。一度立ち止まって一〇年前を振り返ることもいいものだと思う。そして、そのときにはまた更に一〇年後の自分に向けて手紙を書いて埋めてくるつもりだ。

ただ、不安がひとつ。ざっくりとした場所はわかっているけど、実際スコップ片手にあちこち掘るはめになるような気がする。

あのお菓子の缶は無事見つかるかしら。二〇一八年にどこかの展望台でスコップ片手に必死になって地面を掘っている私を見かけたら声をかけずにそっとしておいて下さい(笑)

● essay

エッセイを書くことが決まったとき、

不安はありましたが、始めてみるとあつという間にラスト四回目のエッセイを迎えていました。

普段、誰かとお話をするときには、まとまりのないダラダラとした会話をしていて、文字だけで簡潔に人に伝えるという作業は大変でしたが、少しの間だけでも作家先生気分を味わえて楽しかったです。文章を書くことの楽しさを経験できる機会を与えて下さったことに感謝しています。

また次の人にバトンを渡していきs&gが続いていく。その走者の一人として1年間できたことは、これからの自分にとって自信になったと思います。一年間、本当にありがとうございました。

————◆◆————
農作業などのお忙しい中、一年間とても楽しく、生き生きとしたお話をありがとうございました。(編集部)